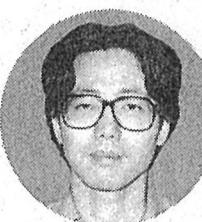


'91回顧 県内

^3^

美術

翁長 直樹



今年一年振り返ってみると市井のギャラリーやデパートのギャラリースペースの拡大とともに多くの企画展の増加が見ついた。

それと那覇市民ギャラリーの新築。要するに美術におけるハードの拡大である。つい最近では県知事が美術館構想を表明した。遅ればば、美術館建設にさまでいじめ熱を注ぐのもそれが彼らの出で精神の有り様を確認する場所でもあるからだ。

月に画廊沖縄が主催した「画廊沖縄十周年記念講演会」は美術関係者を超えて多くのアーティストや、海外市場における美術品の販賣あさりせながらはあるにせよ、これまでの開拓で日本の美術品の総売上高は昨年の三分の一にしか達しないそうである。

精神史を学ぶに最適

十分にいかし、観音を靈性の浦添美術館の空間を満たしてしまおうといふ。浦添美術館の空間を十分にいかし、観音を靈性の浦添美術館の空間を満たしてしまおうといふ。

第一回目の県立芸大の教官による「芸大教官20人展」が市内でかなり広いギャラリースペースをすこしもしない。共同体の「ゼン」が市内で展観され、丸山映、上條文穂、江木健の「三人の彫刻展」が現代彫刻のレベルを見せてくれる。回顧展形式で展覧した。団体では新象展が小数精銳?で奮闘していた。新象はメンバーの新城剛を今年(開邦高校・美術教諭)

戦後美術とらえ直す契機

今年一年振り返ってみると市井のギャラリーやデパートのギャラリースペースの拡大とともに多くの企画展の増加が見ついた。

やっと沖縄でも美術作品が常時見られ、そこで生きた美術作品を通して学ぶ場ができるめどがたったと言うことで朝報であった。美術館と言うのは美術を鑑賞しきりであるばかりでなく、ビジュアルな物を通して精神史を学ぶところでもある。欧米において美術作品を収集したり博物館、美術館建設にさまでいじめ熱

とは言え、美術館がなく、したかに見える。常に西洋をモデルとした日本にとって西洋に代わるモデルがあること、そのことでそのよ

りも、沖縄における近代を考えるのに必要な(千葉氏)を地に着かせる一つの方途がある。「思考」の場所とは共に、思ひ出したり、現代美術の発展をめぐる問題を抱いての画家展は沖縄における近代を考

かなくてはならないわけである。これは永遠の難題であろう。とはいっても、思考 자체が美術になり得るとしてデュシャン以来精神の事柄としての美術が問われてく

るわけで、果たして沖縄にてそのような難問を抱えつつ仕事をしている画家がどうぞいるであろう。その意味からもう九

かで、これが永遠の難題であ

ることを明確に意識して歐米の現代美術の熱氣を持ち込

んで来たのが安谷屋正義で、沖縄における現代美術周年記念として行われた「ヨーロッパ近代絵画の流

れ」も極めてコンパクトで

れ」も極めてコンパクトで